

相互作用と乳幼児の心理・行動発達に関する基礎的研究

分担研究者 小林 登

A. 研究の意義

わが国の工業化、先進化、および生活圏の都市化に伴って、一般生活は豊かになるとともに、小児の生態圏は急速に変化した。その結果、小児の心身の発育、特に心理行動の発達について、小児医療、保育、教育の実践的な分野で多くの問題がみられている。すなわち、小児科学の診療の場では、親子関係の失調、虐待児問題、いじめなど、保育の場では、育児障害など、さらに教育の場では、登校拒否、暴力、非行などの多様な小児の行動問題が、現在社会的ないろいろな局面でみられているのは周知の通りである。

本研究班は、国立公衆衛生院 高石昌弘次長を班長とする「家庭保育と小児の成長・発達に関する総合的研究」の分担研究を行うが、研究目的は乳幼児の心理・行動発達に係わる要因を、児と環境の相互作用の解明を通して明らかにすることにある。すなわち、母子相互作用を中心として、父一子、祖父母一子、同朋一子等の相互作用を解明し、子どもの心の発達を研究する事、換言すると、妊娠、分娩、出生の時点よりはじまる乳児・幼児の育児・保育のあり方の基盤を産科学的、小児科学的、発達心理学的・行動科学的さらには教育学的に研究し、あわせてその社会的意義を明らかにすることにある。

班員は全国の関係分野の専門家から選び、小児科学者7名、産科学者4名、心理・教育・保育学者7名、情報工学などの基礎学者7名、計25名をもって学際的なチームを編成した。

とりあげられた研究プロジェクトは次のように整理することができる。

1. 比較行動的研究：サルなどと人間の子育て行動の比較研究を行う。

2. 情報工学的研究：養育者（主に母親）と子どもとの間の相互作用を、定量・定性的に評価する方法を開発するとともに、システム理論・情報理論に基づいて分析する。
3. 周産期医学的研究：胎児医学・産科学、新生児学の立場から、胎児・新生児の行動・心理発達、母子・父子・相互作用について研究する。
4. 心理発達行動科学的研究：乳・幼児期における小児の心理・行動発達を小児科学・心理学ばかりでなく、行動科学的な立場を強調し研究する。

B. 研究チームの構成

以上の目的のために下記の学際的な研究協力者のチームを構成した。

I. [比較行動学的研究]

1. 糸魚川直祐 大阪大学人間科学部比較行動論研究室（教授）
2. 大島 清 京都大学霊長類研究所（教授）
3. 鈴木 良次 大阪大学基礎工学部生物工学科（教授）
4. 三吉野産治 国立療養所西別府病院（院長）

II. [情報工学的研究]

5. 石井 威望 東京大学工学部産業機械工学科（教授）
- 広瀬 通孝 東京大学工学部産業機械工学科（助教授）
6. 岩田 洋夫 茨波大学構造工学系（助手）
7. 上田 篤 岐阜大学教育学部（助教授）
8. 渡辺 富夫 山形大学工学部情報工学科

III. [周産期医学的研究]

9. 兼子 和彦 葛飾赤十字産院（院長）

- 10.竹内 徹 大阪府立母子保健総合医療センター（副院長）
- 11.多田 裕 都立築地産院小児科（部長）
- 12.夏山 英一 夏山病院（院長）
- 13.中野 仁雄 九州大学医学部産婦人科（教授）
- 14.水野 正彦 東京大学医学部産婦人科（教授）

IV.〔乳幼児心理行動発達科学的研究〕

- 15.加藤 忠明 愛育総合研究所（研究員）
- 16.巷野 悟郎 東京家政大学（教授）・子どもの城
- 17.小嶋謙四郎 早稲田大学教育学部（教授）
- 18.白瀧 貞昭 神戸大学医学部精神神経科（講師）
- 19.利島 保 広島大学教育学部（助教授）
- 20.二瓶 健次 国立小児病院神経科（医長）
- 21.前川 喜平 慈恵医大小児科（教授）
- 22.三宅 和夫 北海道大学教育学部（教授）
- 23.水上 啓子 国立小児病院小児医療研究センター小児生態研究部（研究員）
- 24.若葉 陽子 学芸大学特殊教育施設（助教授）

C. 本年度の研究活動

研究協力者は、従前の研究成果をふまえ、夫々の立場で研究を立案し、研究に着手した。

1986年12月18日に第1回班会議を開き各々の班員が研究計画を発表し、更に1987年2月6日

7日総会場で、1年間にわたる研究成果を発表し、活発に討議した。

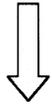
D. 研究成果

本年度は、3年間にわたる班研究の初年度にあたり、主に今後の班研究の方向づけを行った。本研究班の研究においては、定性的な面ばかりでなく、定量的な面を強調する事で班員の合意が得られ、すでに行われてきた母子相互作用研究の成果をさらに発展させつつある。

E. まとめ

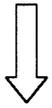
今年度は本基礎的研究が学問的な面のみならず、社会的な面でも極めて重要な意義を有するものである点が改めて班員相互で確認された。児の母親に対する愛着及び母親の児に対する母性の形成等の母子相互関係の成立には、生物学的、あるいは生得的（遺伝的）な因子ばかりでなく、環境的（社会文化的）な因子も関係することが検討された。また、そのことから親以外の養育者と児の相互作用研究の重要性もとり上げられた。本研究成果は育児施設の水準をいかにあげるかなどの具体的な問題に反映されていくものと考えられる。

第2年度は、本年度の成果をふまえて、本研究班の所期の目的を果たすよう努力する。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



E.まとめ

今年度は本基礎的研究が学問的な面のみならず,社会的な面でも極めて重要な意義を有するものである点が改めて班員相互で確認された。児の母親に対する愛着及び母親の児に対する母性の形成等の母子相互関係の成立には,生物学的,あるいは生得的(遺伝的)な因子ばかりでなく,環境的(社会文化的)な因子も関係することが検討された。また,そのことから親以外の養育者と児の相互作用研究の重要性もとり上げられた。本研究成果は育児施設の水準をいかにあげるかなどの具体的な問題に反映されていくものと考えられる。

第2年度は,本年度の成果をふまえて,本研究班の所期の目的を果たすよう努力する。